

華洲園(その1)

東中野本通りと神田川の間の高台・通称「小滝台」は、以前は、「華洲園かしゅうえん」と呼ばれていました。明治44年に発行された「東京近郊名所圖會」なる本に『華洲園・御成山』という項目があり、明治から大正初期にかけての姿がよく描かれているので、原文のまま引用します。

『華洲園は柏木停車場(注1)より東北三丁(注2)の處に在り。四時の花卉かき(注3)を培養し縦覧に供す。園は凡一萬五千坪ありて各處に花壇を設け。中央に温室あり。香色常に絶るなし。其の地は神田舊きゅう(旧)上水渠の北西岸なる高處に倚り。水田を一望し。風景愛すべし。園内四阿あり以て休憩すべし。亭樹ていじゆ(注4)あり以て娛樂すべし。販賣部の外陶器の陳列所もあり

此地はもと御成山と稱し。將軍啓行の地なり。今に三代將軍腰掛の松といひ傳へたる松樹あり。其の松葉已に枯衰せるは惜しむべし。』

(注1・現在の東中野駅)

(注2・一丁は約109メートル)

(注3・花や草木)

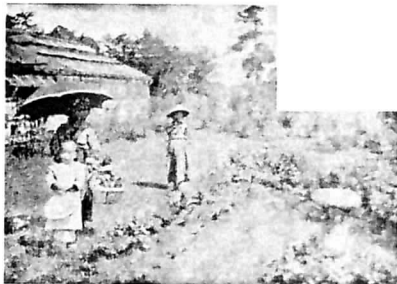
(注4・屋根のある物見台)

いま、小滝台の一角にある東中野小学校の校庭から見える風景は、新宿副都心の高層ビルそしてマンションや民家で、水田が一望できた当時の景色は面影すらありません。また華洲園そのものの姿も、大正から昭和そして現在と大きく変貌していきます。



現在の小滝台

華洲園(同書から)



華洲園(その2)

「華洲園」と言う名称は、明治の末頃、各種の花を四季折々咲かせ、東京の市中に提供する花園があったところからつけられたようです。それ以前は、江戸時代、京都の両替商・仙波氏の所有であったところから『仙波山』とも呼ばれ、さらに時代をさかのぼると、この場所は將軍の『鷹狩場』として、また春日局の下屋敷があったとも伝えられ、歴史的に見ても伝説や話題の多い場所でもあります。その華洲園も大正時代に入ると花の栽培を止め、一区画六百〇二千六百坪という単位で分譲され各界の名士が移り住むようになりました。藤堂伯爵、九鬼水軍の九鬼氏、三越社長の中村利器太郎氏、陸軍大将の井上、尾野両氏など、また中国の周恩来元首相も19歳で日本に留学したころ、この華洲園に住んでいたという記録があります。(注・屋敷街となつた後も、土地の人々はそこを華洲園と呼び続けていた。「小滝台」は戦後)

小生の小学生時代(昭和10年頃)、華洲園一帯は昆虫の宝庫でした。トンボ、セミ、蝶、玉虫、黄金虫、などはイヤという程、クワガタ、カブトムシなども珍しくなく、また凧上げに絶好の原もありました。

屋敷街の中央を走る道(現在、深雪スタジオのある道)の両側には桜並木があり、駐在所(現在、中野文化会館のある角)の老巡査がサーベルを下げ、巡回している姿が思い出されます。

屋敷街に住んでいた方の中で忘れることのできない人がいます。その方は前述した井上幾太郎陸軍大将で、当時在郷軍人会長としており、権威のある方でした。私が軍隊に入隊する時、その報告に行くと「そうか、すっかりやってこい」の一言で奥に入って行きました。もう一人は藤堂さんで、伯爵と男爵の両家があり、後者は若く主計将校姿でよく私の家に煙草を買いに来ました。いずれも印象に残る方でした。